高级日语系列教材

日本现代文学

Riben Xiandai Wenxue

げんだい

编著·田鸣

总主编·王健宜

南開大學出版社

高级日语系列教材

日本现代文学

田　鸣　编著

南开大学出版社
天　津

图书在版编目(CIP)数据

日本现代文学 / 田鸣编著. —天津：南开大学出版社，2010.5

(高级日语系列教材)

ISBN 978-7-310-03429-1

Ⅰ.①日… Ⅱ.①田… Ⅲ.①日语—教材②现代文学—文学欣赏—日本 Ⅳ.①H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 085368 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人：肖占鹏

地址：天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码：300071

营销部电话：(022)23508339 23500755

营销部传真：(022)23508542 邮购部电话：(022)23502200

*

天津市蓟县宏图印务有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2010 年 5 月第 1 版 2010 年 5 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 10.75 印张 267 千字

定价：18.00 元

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022)23507125

序 言

《高级日语系列教材》是为高等院校日语专业高年级（本科三、四年级）以及研究生一、二年级专门编写的，全套教材由语言基础、文学文化、口笔翻译、国情知识四个部分组成，共12种14册。它们分别是：《高级日语精读》（上、下）、《高级日语泛读》（上、下）、《高级日语口译》、《高级日语笔译》、《高级日语写作》、《高级日语听力》、《日本文学史》、《日本古典文学》、《日本近代文学》、《日本现代文学》、《日本历史》、《日本文化》。

本套教材中的《高级日语精读》是天津市“十五”规划教材的重点项目，它以全新的体例和结构，展现了教材编写的新思路，反映出日语教学领域以教材引领的教学改革的积极探索。同时，《高级日语精读》以全新的视角和全新的选材，为日语教学本身提供更为丰富的素材。它的12个单元36篇文章，从关注中国和日本、关注世界、关注人类的大视野出发，既有物质世界的问题，也有精神世界的问题；既有现实的思考，也有未来的展望。每一个单元的文章都精挑细选，话题前卫、语言鲜活、视角独特、特色鲜明。《高级日语精读》既是本套教材的标志性成果，也是其他各册教材的编写宗旨。

本套教材的另一个特色是，有些教材突破以往编写模式有所创新。例如，《日本现代文学》，是将重点放在20世纪20年代初至80年代末、即日本大正末年到昭和末年这段时期的文学上。力图通过对该时期文学史的逐段梳理使读者能够比较清晰地把握这个时期日本文学的流变，同时选取了不同时期代表作家的一篇完整作品而非节选，以便使

读者能够全面地把握作品内涵并借助导读读出自己的理解从而体会本时期日本文学的走向及其意味。

本套教材在体系上的规范也具有独到之处。例如，文学领域由《日本文学史》、《日本古典文学》、《日本近代文学》、《日本现代文学》四册构成，体系清晰、完整，对日语专门人才培养具有指导和规定性的重要意义。又如，《日本古典文学》、《日本近代文学》、《日本现代文学》均由若干课构成，打破了传统的编写模式，突出了课堂教学的特点，主题突出、目的明确，便于教学活动的开展和检查。

本套教材是南开大学日本语言文学学科三十多年来开展的丰富多彩的教学、科研活动的一个缩影，也是我们理论联系实际，一切从教学出发的一次探索和尝试。由于我们水平有限，教材中一定有很多缺点、谬误，诚恳地希望学界同仁和广大读者给予批评、指正。

主编　王健宜

2005 年 5 月于南开园

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

前 言

《日本现代文学》一书是为高等院校日语专业高年级以及日本语言文学专业硕士研究生入门阶段课程而编写的教材。

本教材是在集编者多年教学积累的基础上，从教学实际出发，对日本现代文学从文学史知识的梳理和各个时期代表作家的代表作品的介绍、导读等角度进行了比较系统的观照。

全书共设 21 课，包含文学史知识；小说解读；现代诗、和歌俳句赏析三个部分。本书的编写主要基于以下几点考虑。

1、对于文学史部分，为了便于读者能够比较清晰地把握文学史脉络同时比较便捷地掌握必要的文学史知识，本书不同于以往侧重概述的教材，在文学史概述的基础上还采用了分阶段叙述，其中包含对日本战前和战后的现代戏剧及其韵文的概观。此外，在每一阶段叙述结尾处还以图表形式予以总结并设置思考题。

2、为了便于读者对作家及作品信息并作品内涵有更深入的了解和把握，本书小说赏析部分选取了 12 位不同时期代表作家的完整作品而非节选，并在作品后设置思考题和导读——参考解读。解读部分为编者在参阅相关资料后撰写的，力求从文本细读出发，通过对作品中诸种要素的分析思考捕捉作品的内涵，以图避免主观、片面的赏析。鉴于文学的阅读见仁见智，因此本解读谨期待能够有些许的抛砖引玉之效，以企盼读者有更多元化、多层面的思考和解读。

3、此外，为了便于读者了解本时期的韵文发展脉络并能够品读作品，本书不同于以往侧重小说赏析的文学教材，专设两课赏析日本现代诗歌、和歌及俳句，并分两次对赏析和歌及俳句时的修辞常识等予以梳理和归纳。

在编写本书过程中，参阅了诸多先学的著作及资料，在文中难以逐一注明出处，故附于书后，一并鸣谢。

在本书编撰完成后，承蒙外交学院日语外教蛯原正子老师对本书中作品参考解读部分的日文遣词造句的修改，在此谨表谢忱。

由于编者学识有限，书中不妥和错漏之处也在所难免，敬请各位专家、同仁并读者批评指正。

田　鸣

2010 年 3 月

目　录

第一課　日本現代文学・概観……1
一　おおよその時代区分……1
二　時代概観……2
三　文学概観……4
思考問題……6

第二課　1920年代～1930年代の文学……7
文学概観……7
主な流派・作家及び代表作品……8
思考問題……12

第三課　『頭ならびに腹』……横光利一 13
思考問題……20
作家紹介……20
参考解説……21

第四課　『キャラメル工場から』……佐多稲子 24
思考問題……40
作家紹介……41
参考解説……41

第五課　1930年代～1940年代の文学……44

文学概観 44
主な流派・作家及び代表作品 44
思考問題 49

第六課　『鯉魚』 ..... 岡本かの子 50
思考問題 61
作家紹介 61
参考解説 62

第七課　『名人伝』 ..... 中島敦 65
思考問題 75
作家紹介 75
参考解説 75

第八課　『ざくろ』 ..... 川端康成 78
思考問題 82
作家紹介 82
参考解説 83

第九課　1920年代～1940年代の戯曲・詩・短歌・俳句 86
戯曲概観 86
詩歌概観 86
短歌概観 87
俳句概観 88
思考問題 90

第十課　1920年代～1940年代の詩・短歌・俳句鑑賞 91
【詩】 ..... 中野重治　ほか4首 91

思考問題 …… 94
作家紹介 …… 96
詩を読む要点 …… 97
【短歌】 …… 島木赤彦 ほか 97
思考問題 …… 99
作者紹介 …… 99
参考解説 …… 100
短歌を読む要点・その一 …… 101
【俳句】 …… 高浜虚子 ほか 102
思考問題 …… 103
作者紹介 …… 104
参考解説 …… 105
俳句を読む要点・その一 …… 106

第十一課 1940年代～1950年代の文学 …… 108
文学概観 …… 108
主な流派・作家及び代表作品 …… 109
思考問題 …… 115

第十二課 『顔の中の赤い月』 …… 野間宏 116
思考問題 …… 152
作家紹介 …… 153
参考解説 …… 153

第十三課 『復讐』 …… 三島由紀夫 157
思考問題 …… 170
作家紹介 …… 171

参考解説 172

第十四課　1950年代以後の文学 175
文学概観 175
主な流派・作家及び代表作品 176
思考問題 183

第十五課　『飼育』 ..... 大江健三郎 184
思考問題 242
作家紹介 242
参考解説 243

第十六課　『任意の一点』 ..... 開高健 248
思考問題 258
作家紹介 259
参考解説 260

第十七課　『公然の秘密』 ..... 安部公房 263
思考問題 268
作家紹介 269
参考解説 269

第十八課　『カンガルー日和』 ..... 村上春樹 274
思考問題 280
作家紹介 281
参考解説 281

第十九課　1940年代以後の戯曲・詩・短歌・俳句 286
戯曲概観 286

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩歌概観 286
短歌概観 287
俳句概観 287
思考問題 290

第二十課　1940年代以後の詩・短歌・俳句鑑賞 291
【詩】 ..... 谷川俊太郎　ほか2首 291
思考問題 293
作家紹介 294
読解の要点 294
参考解説 295
【短歌】 ..... 寺山修司　ほか 295
思考問題 296
作家紹介 296
参考解説 297
短歌を読む要点・その二——現代短歌の主な修辞 298
【俳句】 ..... 中村汀女　ほか 299
思考問題 300
作家紹介 300
参考解説 301
俳句を読む要点・その二——現代俳句の主な修辞 303

第二十一課　『私は魚か？』 ..... 大庭みな子 304
思考問題 312
作家紹介 312
参考解説 313

付録 318
日本近・現代文学史年表 318
参考文献 331

第一課　日本現代文学・概観

一　おおよその時代区分

日本の歴史においては、周知のとおり 1868 年の明治維新から明治時代が始まり、現在までの百十数年間は、大正・昭和・平成というように、各年号によって時代区分がなされている。以前はその中の明治（1868～1912）と大正（1912～1926）の二つの時代を近代、昭和元年（1926）以後を現代と呼んでいたが、日本の人口の多くが既に昭和 20 年、即ち第二次世界大戦が終わった 1945 年以後に生まれている現状においては、1945（昭和 20）年までを近代、それ以後を現代と理解する考え方に移りつつあるという。

なお、日本文学史の区分においては、上記日本史の区分をふまえて、現在主に下記の三種類が見られよう。

1　明治・大正・昭和（前期）・昭和（後期）・平成の文学という年号による区分。

2　明治と大正の二つの時代の文学を近代文学或いは近代前期の文学、昭和以後の文学を現代文学或いは近代後期の文学と呼ぶ区分。

3　1945 年を境目に、それ以前の時代の文学を近代文学、1945 年以後の文学を現代文学と見做す区分。

本書では、2 の分け方をふまえ、大正 12 年の関東大震災前後の、日本プロレタリア文学が形成するまでを「近代（近代前期）の文学」、それ以後太平洋戦争が終結して今日までを「現代（近代後期）の文

学」と考え、大正末期から平成までの、特に昭和時代の文学を中心に見てみる。

日本の現代文学を考える場合、それはまた大まかに、下記の4期ほど分けられている。

1　プロレタリア文学と芸術派・1920年代前半～1930年代後半
（大正末期～昭和10年ごろ）

2　文化統制下の文学・1930年代後半～1940年代中頃
（昭和10年ごろ～昭和20ごろ）

3　戦後の文学・1940年代後半～1950年代後半
（昭和20年ごろ～30年ごろ）

4　戦後文学の終焉と現代の文学・1950年代後半以後～
（昭和30年代以後～）

二　時代概観

大正12（1923）年の関東大震災は、経済的な不況に悩む日本の社会と人々に大きな打撃を与えた。昭和初年、日本はさらに世界恐慌の波に洗われて、農村は疲弊し、都会では失業者があふれ，その結果、社会の不安が増大し、社会主義運動が活発化した。しかし、当局はそれに対する弾圧も厳しくなり、昭和3（1924）年には日本共産党員の一斉検挙が行われた。いわゆる3·15事件である。やがて、政治の主導権は日本の軍部が掌握するところとなり、国内では、民衆に対する弾圧、対外的には中国への侵略が始まった。それは、昭和6（1931）年の「満州」事変が、昭和12（1937）年から全面的な戦争に拡大したことである。第二次世界大戦が始まって、アメリカとの対立が激化、昭和16（1941）年、ハワイ真珠湾奇襲攻撃を行い、太平洋戦争に突入した。昭和20（1945）年8月には広島と長崎に原

子爆弾が相次いで投下され、日本は全面的な敗北に至ったのである。

昭和20（1945）年、敗戦を迎えた日本は極度の貧困と混乱に陥れたが、昭和22（1947）年には戦争放棄、国民主権を核とした日本憲法が実施されて、飢餓に苦しみながらも自由主義、民主化などが求められた。男女同権の政治参加が始まり、労働運動が盛んになり、しばらくは社会的、経済的混乱が続いた。昭和25（1950）年に勃発した朝鮮戦争は特需と輸出増加などによって日本の経済を救い、日本経済復興の要因となった。昭和26(1951)年に結ばれた日米安全保障条約によって日本の占領時代が終わり、日本社会は次第に安定期に入る。

昭和35（1960）年、日米新安保条約が批准され、安保阻止闘争やベトナム戦争反対、全共闘学園紛争など、若者中心の政治行動が展開された。一方東京オリンピックの開催、東海道新幹線や高速道路の開通、原子力発電や大阪万博なども大いに日本人の関心を寄せていた。

技術革新や国際的競争力の強化によって、日本は高度経済成長期が迎えられる。しかしと同時に、水俣病（みなまたびょう）をはじめとする産業公害や環境破壊、福祉の悪化などの問題が生じてきた。昭和45（1970）年のはじめ、田中角栄の「列島改造論」によって、新しい経済成長が図られたが、オイルショックなどで挫折した。にもかかわらず、日本は先端的な科学技術産業の支えによって、経済大国となった。同時に、また国際的貢献や地球環境保護、貿易黒字と規制緩和などの課題解決も迫られていた。その後、昭和天皇の崩御による改元を経て、日本に繁栄をもたらした戦後最長の大型景気も低迷を続け、企業倒産や失業者増大など、多くの課題や後遺症を残した。特に社会のひずみや矛盾が露呈され、人間の精神面が問われる契機となった。

三　文学概観

＜大正末期～昭和20年代・(1920年代頃～1945年頃)＞

大正末期、「種蒔く人」「文芸戦線」以来の日本プロレタリア文学はさらに発展し、ソビエト革命の成功に刺激された日本社会主義運動の発展によって、プロレタリア文学が一時既成文壇での隆盛を呈した。一方、これに対して横光利一・川端康成らの「新感覚派」が「文芸時代」によって活躍する。その都会的で新鮮な感覚による現実の捉え方は、人々に新時代の到来を印象付けた。この二つの流れはお互いに反発しあい、従来の伝統的な写実主義の文学とあわせて三派鼎立の様相を呈しながら、いずれも時代の情勢が戦争に巻き込まれていった昭和10年前後にかけて、通俗化していく。即ち、新感覚派は崩壊して心理主義の方向へ傾き、プロレタリア文学は内部の思想的な対立と外部の官憲の弾圧に抗し切れずに衰退し、後に「転向文学」の形で受け継がれていく。こうして戦時中へかけて、文学は空白期が訪れるが、中には島崎藤村『夜明け前』や志賀直哉『暗夜行路』、それに小林秀雄の評論など注目すべきものもあった。

＜昭和20年代以後・(1945年以後)＞

戦後の昭和20年代では、不安と混乱が続く中、言論の自由が保障され、出版界も活況を取り戻して、文学は活発な動きを見せ始める。いわゆる戦後文学の始まりである。それはまず大家の復活を導いて、永井荷風や谷崎潤一郎をはじめ、志賀直哉、川端康成らの創作があげられる。一方当時の戦後の混乱した世相のもとで、「無頼派」と呼ばれた太宰治や坂口安吾らの作家たちの活躍も見せた。また戦時中弾圧されていた旧プロレタリア文学の流れを汲む民主主義文学は、宮本百合子、中野重治(しげはる)らが中心となってスタートした。それに対し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com